

サクセスフル・サイコパスへの第一の条件

ー日本語版 Self-Report Psychopathy Scale 短縮版の開発を通してー

○柳田宗孝¹・荒井崇史²・藤 桂³

(¹横浜家庭裁判所・²追手門学院大学 心理学部・³筑波大学 人間系)

キーワード：サイコパシー、犯罪、ソーシャルサポート

The first condition of the Successful psychopath; Development of Japanese Self-Report Psychopathy Scale Short-form

Munetaka Yanagida¹, Takashi Arai² and Kei Fuji³

(¹Yokohama family court, ²Otemon Gakuin University, ³University of Tsukuba)

Key Words: Psychopathy, Crime, Social support

問題と目的

近年、再犯者率は一貫して上昇し(法務総合研究所, 2014), 全犯罪件数の約6割が再犯者によって行われているという報告もある(法務総合研究所, 2007)。すなわち、再犯防止対策は我が国における重要な課題である(法務総合研究所, 2012)。

再犯に結びつくパーソナリティ特性として、サイコパシー特性が挙げられる。たとえば、サイコパシー特性の高い犯罪者の再犯率は、そうでない犯罪者よりも高い(Hemphill, Hare, & Wong, 1998)ことが明らかとなっている。我が国でも、少年院入所中の少年のサイコパシー特性の高さが指摘されており(川田・福井・吉川, 2008), サイコパシー特性と犯罪行動および再犯との関連が示唆される。

この点に関して昨今では、サイコパシー特性が高くと、犯罪行動を行わず社会に適応し、むしろ大きな成功を収めるという“サクセスフル・サイコパス”の存在が注目を集めている。例えば、サイコパシー特性が高くと、家族との強い絆(DeMatteo, Heilbrun, & Marczyk, 2005), 手厚い家族サポート(Masui, Iriguchi, Terada, Nomura, & Ura, 2012)が調整要因として機能し、攻撃的・犯罪的な行動が抑制されることが示されている。これらの知見を総合すれば、サイコパシー特性の高い者にとって、周囲からのサポートの存在が社会的適応のためには必要となると推察される。しかし、海外におけるこれらの知見を、社会状況の異なる我が国にそのまま適用できない可能性がある。また、我が国における研究であるMasui et al. (2012)も、実験室実験であるため、日常的な文脈下での実際の犯罪行動に対する影響は検討していない。そこで本研究では、我が国でも、周囲からのサポートがサイコパシー特性と実際の犯罪行動との結びつきを調整するか、つまり、サクセスフル・サイコパスに必要な条件となるかについて検討することを目的とする。

またサイコパシー特性の臨床的評価基準としては、PCL-R (Hare, 2003)が広く用いられてきた。近年では、比較的簡便に使用可能な尺度として、PCL-Rとの高い並存的妥当性が確認されたSelf-Report Psychopathy Scaleの短縮版である“SRP Short Form (SRP-SF; Paulhus, Neumann, & Hare, in press)”も開発されている。これを踏まえ本研究では、日本語版 SRP 短縮版を開発し、信頼性と妥当性の検証も併せて行いつつ上記の目的を検討する。

方法

調査対象・手続き 私立大学の大学生・大学院生を対象に質問紙調査を実施し404名(男性138名、女性263名、不明1名; 平均19.91歳, $SD=1.03$)の回答を得た(2014年7月)。

質問紙の構成 (1)サイコパシー特性:SRP-SFの29項目について、日本語版を作成して用いた。日本語版の作成に当たっては、原著者による許諾を得て、翻訳およびバックトランスレーションを行い、さらに原著者による確認を経て、最終版の項目を作成した(5件法)。また、妥当性確認のために、日本語版一次・二次・サイコパシー尺度(杉浦・佐藤, 2005)のうち、大隈・金山・杉浦・大平(2007)において因子負荷量の高かった21項目を用いた(4件法)。(2)家族サポートおよび友人・恋人サポート:QRI日本語版(浦・高野, 1995)の下位尺度“ソーシャルサポート”の各7項目(5件法)。(3)犯罪意図および犯罪行動:鈴木・鈴木・原田・井口(1996)および岡邊(2010)に基づいて作成した各23項目(5件法)。

(4)個人属性:性別、年齢など。

結果

犯罪行動の因子構造 23項目について因子分析(主因子法, Promax 回転)を行った結果, “対人犯罪行動”, “財産犯罪行動”の2因子が示された。犯罪意図も同様の結果であった。

日本語版 SRP 短縮版の信頼性および妥当性 SRP 短縮版の項目について確認的因子分析を行った結果, 原版と同様に“対人操作”“冷淡な感情”“不安定な生活様式”“反社会性”の4因子が確認された。また、各因子の α 係数も十分な値であり($\alpha=.71\sim.82$), さらに大隅他(2007)の尺度の各因子との間で有意な正の相関が示された($r=.17\sim.70$, $ps<.01$)。加えて、サイコパシー特性と犯罪意図および犯罪行動との関連について共分散構造分析を行った結果(Figure 1), 一次性サイコパシー特性の“対人操作”と“冷淡な感情”は犯罪意図を介して犯罪行動を促進し、二次性サイコパシー特性の“不安定な生活様式”と“反社会性”は犯罪行動を直接的に促進することが明らかとなり、先行研究における理論的予測と合致した影響過程が示された。

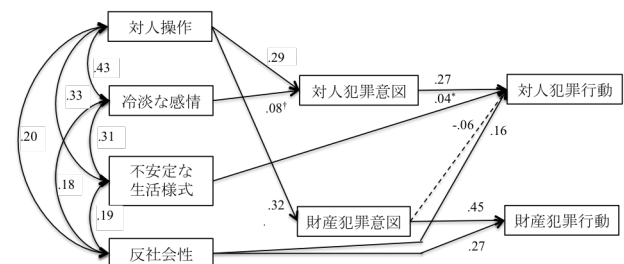


Figure 1. サイコパシー特性が犯罪意図および犯罪行動に影響を及ぼす過程 ($n=402$)

四角は観測変数を意味し、図中の数値は標準偏回帰係数を示す。誤差変数の図示は省略し、有意なパスのみ記載した ($p<.10$, * $p<.05$, それ以外はすべて $p<.01$)。実線は正のパス、点線は負のパスを示す。

$\chi^2(11)=27.181(p<.01)$, $NFI=.98$, $TLI=.97$, $CFI=.99$, $RMSEA=.06$

家族および友人・恋人サポートの調整効果 従属変数として犯罪意図および犯罪行動、独立変数として step 1 に個人属性、step 2 にサイコパシー特性、step 3 に家族および友人・恋人サポート、step 4 にサイコパシー特性とサポートの交互作用項を投入した階層的重回帰分析を行った。その結果、財産および対人面での犯罪意図と犯罪行動の双方に対して、step 4 の交互作用項が有意となった。単純傾斜分析の結果, “財産犯罪意図”に対しては、家族サポートが高い場合のみ, “冷淡な感情”からの影響が負となり、抑制されることが示された($\beta=-.22$, $p<.01$)。しかし, “対人犯罪行動”に対しては、家族サポートが高い場合に, “反社会性”からの促進的影響が強まることが明らかとなった($\beta=.49$, $p<.01$)。

考察

日常的な文脈下でも、周囲からのサポートが、サイコパシー特性と犯罪行動との関連性を調整することが示された。しかしその効果は一樣ではなく、場合によっては犯罪行動を促進する可能性も示された。間違った治療や介入はサイコパスの暴力行為を伴った犯罪を増加させることが示されているが(Rice, Harris, & Cormier, 1992), 本研究は、そうしたサイコパシー特性者の治療処遇の困難さを実証的データに基づいて明らかにしたものといえる。